



中島敦著

山月記・李陵

A4用紙で印刷すると、実寸サイズがご確認いただけます。
※倍率100%の場合

目次

弟子 ^{でし} ……	119
文字 ^{もじ} 過 ^か ……	103
李 ^り 陵 ^{りょう} ……	21
山 ^{さん} 月 ^{げつ} 記 ^き ……	5

この作品には不適切と思われる表現がありますが、
作品の文化的な価値を考慮し原文のまま掲載いたしました。

山月記

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、讒略に帰臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頬の美少年の倂は、何処に求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかつたその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の偽才李徴の自尊心を如何に傷けたかは、想像に難くない。彼は

快々として楽しまず、狂悖の性は愈々抑え難くなつた。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆出した。彼は二度と戻つて来なかつた。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は、誰もなかつた。

翌年、監察御史、陳郡の袁徳という者、勅命を奉じて嶺南に使い、途に商於の地に宿つた。次の朝未だ暗い中に出発しようとしたところ、馭吏が言うことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょうと。袁徳は、しかし、供廻りの多勢なのを待み、馭吏の言葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁徳に躍りかかるかと思えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった」と繰返し呟くのが聞え

た。その声に袁儻は聞き覚えがあつた。驚懼の中にも、彼は咄嗟に思いあつて、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁儻は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁儻の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであろう。

叢の中からは、暫く返辞が無かつた。しのび泣きかと思われる微かな声が時々洩れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。

袁儻は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となつている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決つているからだ。しかし、今、凶らずも故人に遇うことを得て、愧赧の念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜惡な今の外形

を厭わず、曾て君の友李徴であつたこの自分と話を交してくれないだろうか。

後で考えれば不思議だつたが、その時、袁儻は、この超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪もうとしなかつた。彼は部下に命じて行列の進行を停め、自分は叢の傍に立つて、見えざる声と対談した。都の噂、旧友の消息、袁儻が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかつた者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁儻は、李徴がどうして今の身となるに至つたかを訊ねた。草中の声は次のように語つた。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊つた夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走つていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。気が付くと、手先や脰のあ

たりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然とした。そうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろうか。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駈け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還って

来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己の残酷な行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今までは、どうして虎などになつたかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了うだろう。ちようど、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のように途で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了い、初めから今の形のものだったと思ひ込んでいたのではないか？